

卒業時における看護技術習得状況 —実習状況と習得状況の関連—

新潟医療福祉大学看護学科

袖山悦子, 中山和美, 坪川麻樹子, 宇田優子, 島貫秀樹

【背景】

厚生労働省の「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」¹⁾では資格のない学生が実習で習得する看護技術の範囲が狭められ、就職後にリアリティショックを受ける者や早期退職をする者もいることが指摘され、看護技術の種類と卒業時の到達度が示された。A大学では大項目 18 と中項目 118 の看護技術を抽出した。学部学生の看護技術習得状況については、生活援助に関する項目については実習経験が多く、実施する自信は高いが、診療の補助に関する項目は実習経験が少なく実施する自信も低い傾向がみられている²⁻³⁾。そこで、A大学の卒業時の学生が、実習中に経験した看護技術の状況と習得度を明らかにし、看護技術習得に向けた示唆を得ることを目的に研究に着手した。

【方法】

調査方法:平成 22 年度卒業見込みの A 大学看護学科 4 年全員に平成 23 年 2 月 22～3 月 1 日まで、A 大学で検討した基礎看護技術 118 項目について、WEB 上入力で調査した。

調査内容:＜看護技術の経験状況＞は、「一人で実施」「指導者と共に実施」「見学」「未経験」の 4 段階評定とした。＜看護技術の習得度＞については、「自信がある」「まあまあ自信がある」「あまり自信がない」「自信がない」の 4 段階評定とした。

倫理的配慮:研究の意図を文書と口頭で説明し、同意書にて同意を得た。また、自由意志での参加であることを説明した。分析方法:＜看護技術の経験の状況＞は、「一人で実施」「指導者と共に実施」「見学」「未経験」で単純集計をした。

＜看護技術の習得度＞は「自信がある」「まあまあ自信がある」を「自信がある」、「あまり自信がない」「自信がない」を「自信がない」の 2 群に分けて単純集計し、＜看護技術の経験状況＞、＜卒業時の到達度Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ＞、＜学内演習・講義＞と関連させて考察した。なお、卒業時の到達度Ⅰは単独で実施できる、Ⅱは指導のもとで実施できる、Ⅲは学内演習で実施できる、Ⅳは知識としてわかるである。118 項目のうち、卒業時到達度がⅠ・Ⅱの項目は 75 項目である。

【結果】

65 名の学生から研究協力が得られた。

1. 看護技術の経験状況と卒業時到達度

「一人で実施」「指導者と共に実施」と回答した学生が 80% 以上の看護技術は、36 項目 (30.5%) だった。36 項目すべてが卒業時の到達度Ⅰ・Ⅱだった。

「一人で実施」「指導者と共に実施」と回答した学生が 30% 未満の看護技術は 47 項目 (39.8%) だった。そのうち、卒業時

の到達度Ⅰ・Ⅱは 11 項目 (23.4%) だった。また、卒業時の到達度Ⅲ・Ⅳは 36 項目 (76.6%) だった。

2. 看護技術の習得度と卒業時到達度

「自信がある」と回答した学生が 80% 以上の看護技術は、21 項目 (17.79%) だった。21 項目ともに卒業時の到達度がⅠ・Ⅱだった。

「自信がある」と回答した学生が 30% 未満の看護技術は、42 項目 (35.59%) だった。そのうち、卒業時の到達度がⅠ・Ⅱは 11 項目 (26.19%) だった。また、卒業時の到達度Ⅲ・Ⅳは 31 項目 (73.8%) だった。

3. 看護技術の経験状況と看護技術の習得度

「一人で実施」「指導者と共に実施」と回答した学生が 80% 以上の看護技術 36 項目のうち、「自信がある」と回答した学生が 80% 以上の項目は 20 項目 (55.55%) だった。「コミュニケーション技法」は 98.6% の学生が経験しているが「自信がある」と回答した学生は 70.6% だった。

「一人で実施」「指導者と共に実施」と回答した学生が 30% 未満だった看護技術 47 項目のうち、「自信がある」と回答した学生が 80% 以上だった項目はなかった。

4. 看護技術の習得度と学内講義・演習

「自信がある」と回答した学生が 80% 以上の看護技術は、学内で講義・演習がすべて実施されていた。

「自信がある」と回答した学生が 30% 未満の看護技術は、講義はすべてなされているが、演習のない項目が 13 項目あった。

【考察】

実習での看護技術の経験が高い割合を示した項目は、学内で講義・演習がなされていたことから、学生の知識と技術が実習で活かされ実施され、習得度を高めているものと思われる。また学生が「1 人で実施」できなくとも「指導者と共に実施」しても習得度に繋がっていたことから、臨地の指導者や教員の関わりが重要である。しかし、実習での経験が必ずしも習得度に繋がっているわけではない。学生のコミュニケーション能力の不足が指摘されている⁴⁾が、A 大学もその傾向がみられ、卒業時到達度Ⅰ・Ⅱの看護技術が習得されていないことも含めて今後の課題である。

【結論】

1. 実習で経験した割合の高い看護技術は学生の習得度に繋がっている傾向がみられた。

2. 学内演習のない項目は経験・習得度が低い傾向にあった。

【文献】

1) 看護基礎教育の充実に関する検討会報告書:厚生労働省 www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/s0420-13.html

(2011/08/17 確認) 2) 稲垣美紀・土井洋子・西上あゆみ: 学部学生の卒業時における看護技術の習得状況(第 2 報)大阪府立看護大学紀要, 9(1):7-14, 2000. 3) 吉村洋子・笠井恭子・寺島喜代子: 臨地実習前後における看護技術習得状況, 福井県立大学論集, 23:131-142, 2004. 4) 前掲 1).